

『震災復興の現状と課題—全国曹洞宗青年会の取り組み』

全国曹洞宗青年会 顧問／災害復興支援部アドバイザー
伊達市霊山町 龍徳寺住職／成林寺副住職 久間泰弘氏

（1）東日本大震災発生からの全国曹洞宗青年会の対応

全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）は曹洞宗の青年部（18-41歳）であり、全国50団体、約3000人で構成。阪神淡路大震災から組織的なボランティア活動を開始。久間氏が会長を務めていた二年間で、全国の会員がいつでもどこの災害に対しても活動に参加できるように、災害対策の組織を改編。災害支援活動では確実・正確な情報収集が最重要事項であるため、「本部⇄各管区（全国9管区）⇄各県の団体」という双方向のやり取りを通じて本部に全情報を集約する情報網を作り、日頃から訓練。年数回災害対策に関する訓練・研修会を実施。また、全国社会福祉協議会による災害ボランティアリーダー研修会に毎年参加し、そこで全社協や全国のNPO・NGOに人脈を作ってきたことが、今回の災害支援においても生かされている。

<情報収集>

即日「災害復興支援部」を立ち上げ、通信困難な中、主にEメールを通じて可能な限り情報の収集に努め今後の対応を図った。情報収集は活動するメンバーの意識を喚起する効果や、活動の人数を増やしたり、重要なスキルを持つ人を引き入れるなどの効果も重要。

<緊急支援>

物資支援は当初最優先課題ではなかったが、各地から要請を受け、3月17日、18日と福島県6都市（白河市、泉崎市、須賀川市、田村市、福島市、伊達市）で生活維持の物資援助を行なった。その後、岩手県、宮城県に対しても物資支援を行う。物資支援ほど災害ボランティアで大変なことは無く、現地に行ったボランティア人員が物資の仕分けに忙殺され、優先すべき人命の救出や維持に悪影響が出ることもあり、安易に物資を送れば良いというものではない。一方で、物資が無くてそれで命が繋がらないという状況もあった。

<被災者への継続支援>

今回の大震災では福島県伊達市の成林寺内に全曹青「災害復興支援現地本部」を設置し、災害復興支援活動の拠点として情報収集と現地での活動調整を行なった。そこから県内各地をはじめ、岩手県、宮城県においても各種支援活動を展開している。

（2）曹洞宗青年会の活動実態

発災以来、全国 64 団体、現地活動者延べ人数 1800 人余り（H23 年 12 月末現在、会員外の一般参加者を含む）。活動内容は物資支援、一般ボランティア、寺院復旧活動、臨終読経供養、行茶（ぎょうちゃ、傾聴ボランティア）活動、電話相談窓口「観世ふおん」の開設（常時からあるが、その被災地版）、孤立防止の「文通プロジェクト」、仮設住宅でのワークショップ（自立支援）提案（アクリルたわしを作ってもらい、会で買い上げて販売を代行、収益を仮設住宅に還元）、原発事故による避難者へのサマーキャンプ開催、除染ボランティアなど。

（3）復興支援活動（ボランティア活動）の理念、方針について

「僧侶」という立場、「慈悲」の姿勢が重要であるという自己認識を保持しながらも、自分の立場主張を相手（被災者）に押し付けないこと。久間氏自身「ボランティアは触媒である」（有馬実成・社団法人シャンティ国際ボランティア会専務理事）という言葉を大切に受け止め、仲間と確認し合っている。また、現地活動の方針として、必ず各地行政の災害対策本部や社協との連携を図るように努めている。被災した方々の生活が総合的に向上していくような活動であるべきだが、外部から入ったボランティアはその一面しか見ることができないため、ニーズを正確に知る協力者・コーディネーターが必要。

（4）被災地での行茶活動（曹洞宗における「行茶」とはどのようなものか）

行茶（傾聴ボランティア）活動は、物理的、心理的にストレスを抱え、先の見通しが見えない不自由な生活を余儀なくされる多くの方々への心休まるひと時を提供する活動。もとは曹洞宗の儀式であり、修行中に老師や仲間とお茶を飲みつつ話すことで、自分の立ち位置や修行の進捗を客観的に見つめ直す効果がある。被災地では「一人じゃないんだ」と、同じいのちを生きる仲間として通じ合う心確かめ合う効果。また、お茶を飲むという日常が崩れた被災地（普段は温かい物を飲食できていない）において、寄り添いながら時間を過ごし、お茶を通じて日常を取り戻していただく。

傾聴は重要だが心の傷を悪化させてしまう危険性もあり、行茶活動をするメンバーは必ず事前にレクチャーを受ける。行茶の仲間内では「本人から話さない限り津波や家族のことなどを話題に出さない」と約束。

<「行茶活動」に至った経緯>

07 年「能登半島地震」で初めて「行茶活動」を実施。同年 7 月「中越沖地震」でも同様の活動を展開。久間氏は 04 年「中越地震」で炊出し中に会った女性から「（お坊さんに）少し話を聴いてほしい」と頼まれて気づきを得、僧侶に求められている、僧侶に出来る活動を模索。「傾聴」という副次的（二次的）ボランティア活動の重要性に注目・導入の検討を始める。

行茶は曹洞宗のボランティア活動として広く社会に認知されつつあり、被災地の社会福

社協議会をはじめ行政からも活動の要請が多くなされている。被災地は比較的曹洞宗の檀家が多いこともあり、自死の問題等について、医療関係者からも連携を求められることが今回の震災では多かった。

今後はそういった要請に応えるべく、特に仮設住宅移転後の被災者への生活対応など、地域の復興につながるような支援、被災者に自立の助けとなる支援を考えていきたい。

<「行茶活動」の目的・特徴について>

- ・物理的に暖かいお茶を届ける
- ・被災者との会話と心の mass care (マスケア 多数・傾聴)。僧侶は医療や心理の専門職ではないが、日頃から人々の生死に関わっている臨床者であるという自覚と責任感がある。順に細かい目の策で受けていくように、マスケア→ASD (急性ストレス障害) への対応→PTSDへの対応という仕組みの中で、第一の段階のケアを担う。
- ・被災者のニーズをボランティアセンターや行政など関係機関に届ける。「避難所にいる人に暖かいお茶を」で始まった活動が各避難所の見回り・ニーズ聞き取りも担うことになり、行政やボラセンとの関係が深くなっていく (例: 体育館に布団一枚で腰が痛い→布団マットの手配、女性が着替えし難い→簡易更衣室の設置など)。

(5) 今後の課題

<被災地から観えるこれから>

精神面、物質面で微妙な温度差が存在する (例: 補助金の受給の有無による意識の違い、地元の飲食店が営業を再開している傍で炊き出しをしているなど)、仮設住宅・みなし仮設入居者と地域住民間の交流を図り、人口減少などによって疲弊する地域コミュニティづくりに対する援助の必要性 (例: 交流会としてお茶や囲碁将棋の集まり、また写経のニーズも多い)。また、これまで以上に、それぞれの支援団体の特徴を活かした活動と、様々な専門分野との活動連携が必要である。地域と住民の主体性を尊重し、地域コミュニティの構築と住民の生活不安の解消を図り、共助の生活の場づくりに貢献したい。

<活動者として>

- ・無常、世の中の苦悩と正面から向き合う。他者への想像力を持ち得てこそ宗教者たり得る。自身の修行と被災者支援を一体のものとして。
- ・自らが主役になることを厳に慎み、常に被災地・被災者が主役であること。
- ・被災者の自立助力。手を引くのではなく、隣に寄り添う伴走者の意識が大切。
- ・同志 (仲間) に意識と行動を繋ぐ重要性。現地の人々の声を届ける代弁者としての役割。また、災害が重なりと一団体では対応困難であり、初期段階からの他団体との連携の強化、その訓練がますます重要となる。宗援連情報交換会にもそれを期待する。